

福山に桜川の花開く

秋には馬場さんの解説で卒都婆小町

松井彬の「鶴・白頭」。

大島能楽堂を所有する大島家において現当主の政允は四代目。四人の子供に恵まれ、長男の輝久も喜多流の若手として東京で研鑽を積んでいる。泰子夫人も、

昨年暮れ全国ネットのテレビ放送で「奥様は能楽プロデューサー」に取り上げられ、縁の下の力持ちとして、能楽普及に尽力する姿が多くの人々を魅了した。大島家と能との関わりは明治維新のころに遡る。福山藩お抱えだった能役者の家が途絶えたため、藩士であ

った大島七太郎が十四世喜多平太に師事し、備後一円に喜多流の能を普及させた。二代壽太郎は新作能「鞆の浦」を大正六年に演能し、三代久見は昭和四六年に自宅に能楽堂を建てた。昭和三年より、年四、五回の定期公演を開催し、この四月の公演は第二、三

回を数えた。同家の弛まぬ努力の結果であろう。十一月三十日には馬場あき子を解説者に迎え、政允による「卒都婆小町」が演じられる予定（文中、敬称略）。写真は「桜川」の大島衣恵とシテ松井彬の「鶴」

写真・文 神田佳明

は大島政允の長女で、喜多流において初めて女性の能楽協会入会を許された大島衣恵。綱のさばきも佳麗に桜尽くし舞を舞った。もう一つの能は

